

オーストラリア取材記 2006年

1. オーストラリアを取材するにあたって

地理を学習する際、オーストラリアの地誌ではどのような学習をするだろうか。広大な国土には、熱帯から温帯までさまざまな気候がみられ、その気候にあわせて内陸部から同心円状に区分された農業地域が広がり、鉱工業では鉄鉱石や石炭の採掘がさかんである。民族でいうと、先住民のアボリジニとヨーロッパ、アジアからの移民の歴史を学習するだろう。このようなオーソドックスなオーストラリア地誌学習に必要な、地形や気候、産業や文化に関する写真の収集のため、私たち取材班は、2006年9月、オーストラリアの大地を目指した。今回の取材では、パース、ポートヘッドランド、ニューマン、エアーズロック、アリススプリングス、シドニーと取材した地域が多く、取材内容も多岐に渡ったため、大きく三つの観点にまとめて報告する。

2. オーストラリアを支える鉄鉱石産出

今回の大きな目的の一つが、鉄鉱石の産出現場の取材であった。現在オーストラリアからの鉄鉱石輸出は好調で、特に中国への輸出の増加が著しい。鉄鉱石産出がさかんなウェスタンオーストラリア州では、実際にこの鉄鉱石輸出のために好景気であり、人々の生活にもゆとりが見られた。



写真 1 マウントホエールバック鉱山の露天掘り

鉄鉱石の採掘現場としては、マウントホエールバックを訪れた。この鉱山は南半球最大級の露天掘りの鉱山であり、その露天掘りの大きさは、縦幅 5.4 km、横幅 1.5 km と広大である。高さ数mもある巨大な重機も、この鉱山の中ではゴマ粒ほどにしか見えなかった。ここでの作業員の給料は高く、トラックの運転手の年収が 900 万円ほどだという。この高収入が人口の移動をもたらし、この鉱山がある町ニューマンには、ニュージーランドをはじ

めとする海外からの移民が多いということであった。

ニューマンから掘り出された鉄鉱石は、ここから約 270 km離れた港町のポートヘッドランドに鉄道で運ばれる。この鉄道は連結した車両が最長で 7 キロにもおよび、世界記録を保持している。ポートヘッドランドでは、ニューマンから到着した鉄鉱石を積み下ろすところから見学することができた。数百両続く列車の 1 両 1 両は、遠目には小さいが、間近で見るとその大きさに驚く。積み下ろされた鉄鉱石は粉碎、選別の工程を経て、ベルトコンベアーで港に停泊している運搬船に積み込まれる。私たち取材班の見学中には、韓国への輸出用の船舶への積み込みが行われていた。この町に住む住民の大多数は鉱山関係者であるが、近年の鉱山関係の好景気により人口も増加しており、鉄鉱石の粉碎の際に舞う粉塵に新住民から不満の声が聞かれるという話が印象的であった。

3 . 内陸部での生活

オーストラリア内陸部には、地図帳で確認できるとおり、乾燥した大地が広がっている。しかし、ただ砂漠が広がっているだけではない。乾燥に強い草木がまばらに生え、粗放的ながら牧畜も営まれている。私たち取材班は、このようなオーストラリア内陸部での人々の生活の取材のため、アリススプリングスを訪れた。



写真 2 アリススプリングス近郊の広大な牧場と掘り抜き井戸

まず私たちが訪れたのが、牛の牧場である。オーストラリアの牧場は、私たちの常識では考えられないほど広大である。このあたりで最大のものが1つの牧場で1万km²、さらに別の州には3万km²もの広さをほこる牧場もあるとのことである。日本の国土面積が約38万km²であることを考えると、その大ききの程がうかがえる。主要な道路はこのような牧場の中を通っているが、牛の姿をほとんど見ることがないために、牧場の中を走っていることを忘れてしまう。私たちが取材した牧場は、アリススプリングスから100km南西にある牧場で、約2300km²の広さに約3000頭の牛を飼っていた。水は掘り抜き井戸を掘り、地下60mからくみ上げていた。塩分濃度が強いが、家庭の飲み水としてもそのまま利用していた。かつてはくみ上げの動力として風車が使われていたが、近年ではモーターによるくみ上げが一般的であるという。さらに、ソーラー発電による動力を導入している農家も増えているということであった。

また、私たち取材班は、このような人口密度が低い内陸部において大きな課題となる医療と教育に関しても取材を行った。まず医療に関しては、フライング・ドクター制度というものがある。これは、近くに病院がない地域で急患が発生した場合に、飛行機でその搬送を行うシステムであり、現在オーストラリアには23のサービス基地がある。私たちが訪れたアリススプリングス基地では、半径約600kmの範囲をカバーしており、飛行機3機で、緊急時に通報から2時間以内に現場に到着できるよう備えているということであった。教育の面で特徴的であったのが、通信教育である。これは先生がスタジオ、生徒が各家庭において通信機器でやりとりを行う形態の教育である。私たちが訪れたアリススプリングスの学校では、2003年からインターネットを導入し、スタジオにいる先生の顔を見ながらパソコンでやりとりができるようになったが、それまでは無線機などを使っていたという。生徒同士が顔を合わせることは、運動会などの年に数回の行事の機会しかなく、自宅が最大で2000kmも離れた生徒どうしが同じ授業を受けていた。医療にしても教育にしても、内陸部ではその管轄エリアが想像以上に広範であり、驚きの連続であった。

4．都市部での生活

オーストラリアでは、その人口の大部分が温暖な沿岸部の都市に集中している。乾燥した内陸部とは風景がまったく異なり、近代的なビルが建ち並んでいるが、その中にイギリス統治下の面影が残る歴史的建造物が見られるのが特徴的である。私たち取材班は、南西部の中心都市パースと、国内最大の都市シドニーを訪れ、都市問題とその解決や、多民族社会の様子を取材した。



写真 3 パース市内を走る無料バス

オーストラリアの都市が抱える問題の一つが渋滞である。特に朝夕には、郊外からの通勤者により、都市と郊外を結ぶ幹線道路での渋滞が著しい。そこで、各都市がさまざまな対策を採っていた。パースでは、都市と郊外を結ぶ幹線道路の途中に鉄道の駅と隣接した無料駐車場を設け、そこに車を駐車してから電車で通勤できるよう「パーク&ライド」というシステムを取り入れていた。利用者に話を聞くと、中心地までマイカーで行くよりも電車に乗り換えるほうが通勤時間の短縮になるため、利用客は多いということであった。また、市内の中心部をマイカーで移動しなくても済むように、一定エリアの交通機関料金を無料とする政策も採っていた。一方シドニーでも、市内中心部の渋滞エリアの道路に、バス専用車線を設けるなどの工夫を行っていた。

多民族社会の取材では、街のさまざまな場所を歩き、行きかう人々を写真に収めていった。ムスリムの衣装を着た女性もいれば、インドや中国をはじめとするアジア系の人々、ヨーロッパ系の人々など、街を行きかう人々の人種もさまざまであり、ショッピングモー

ルの中にあるフードコートにも各国の料理店が並んでいた。民族によってはエスニックコミュニティを形成しており、郊外には中華街やベトナム人街も見られた。オーストラリアは、白豪主義の時代を経て、それぞれの民族の文化を尊重する多文化社会の形成に努めており、それぞれの民族の言語での授業なども行われている。今回の取材では、日程上このような多文化社会と教育という観点に迫れなかったことは残念であった。

5 . 取材を終えて

今回は、前述した内容以外にも、移民の歴史の遺産でもあるフリーマントル刑務所や、エアーズロック、乾燥地形の空撮などの取材も行った。取材中には、国内移動だけでも 6 回も飛行機を使用し、オーストラリアの広大さを身をもって体感した。内陸部と都市部の両方を訪れることができたため、オーストラリアのさまざまな顔を見ることができたことも収穫の一つであった。また、取材して印象的であったのが、アジアとのつながりを感じる場面が多かったことである。鉄鉱石採掘では、その輸出のほとんどが日本や中国・韓国であったこと、フードコートの多くで、タイやマレーシア、中国、日本の料理が食べられたこと、シドニーの街に日本と韓国の電気製品メーカーの大看板が見られたことなどである。

その他にもさまざまな発見があり、オーストラリアを知る上で貴重な取材であった。今後、この成果を教科書や資料集、その他の刊行物等で反映させていきたい。

(T. H)